

中村要君を思ふ

山 本 一 清

前後十二年間、天文研究の伴侶として、晝となく夜となく、公私の生活を共にした中村要君が、急に亡くなつた。去る九月二十四日の早朝である。此の日は今後永く自分にも思ひ出の日となるであらう。

中村君の二十九ヶ年の生涯は、短かいものであつた。しかし、學界のために、社會のために、又、家庭のために、なし遂げた貢献は實に大きい。この短かい年月の間にも、既に、普通の人の二三人ぶんの大事業を敢行したのであつて、質にも、量にも、實に偉大なる人物であつた。殊に、直ぐ今後の、更に大きい功績を豫想するとき、いくら惜しんでも、惜しみ切れない。

中村君の死は、世の多くの人には、永久の謎として、「解けないまゝに、残るであらう。自分も（毎日毎夜、生活を共にした此の自分自身も）今にして思へば、中村君の心境を、餘りに知らなさ過ぎた。實に慚愧に堪えない氣がする。——尤も、世間の人々の中では、かねてから、自分がやはり最も多く中村君の私事を知つてゐたので、現に、彼が急死するより十日ばかり以前の、九月十二日の午後、花山で、久しぶりに會つた時などには、彼の顔色のいよゝゝ管ならぬ様子を見るに見かねて、

『君！ 君が郷里へ歸つて静養するのは、全く駄目だよ！ 少し亂暴だが、ウンと思ひ切つて、半年ばかり、遠くへ去つて、行方を晦ました方が好い！』と、自分は、可なりマジメに薦めたのであつたが、人一倍親孝行の彼は、此の亂暴な忠告を、直ぐ聽かうとはせず、只、にが笑ひをしてゐた。之れが、縁淺からぬ彼と自分との永久の別れとなつて了つたのであつた。

中村君が、『夜に眠られない』、『眼が悪く（亂視に）なつた』、『神經衰弱になつた』と言ひ出したのは昨年の暮れ頃からであつた。自分は斯うした訴へを聽く責任を常に痛感した。そして、なるべく外界からの妨害を、其の日常生活に無くさせるため、自分もいろいろと苦心した。そのためには、天文臺本館の内外に多少の營繕工事を施したり、又、宿舍の模様變へなども行つた。

そして、「観測者を優遇しなければならぬ」ことに極力注意した。——しかし、今にして思へば、斯うした自分等の心遣ひは、中村君の病症を癒すべく、ホンの末梢的の効果を挙げ得るに過ぎなかつた。病症の大きな原因は、別に存在したのであつた。顧へば、自分も、人生の大きな學問をさせられたのであつた!!

中村要君は明治三十七年（1904年）四月八日、滋賀縣滋賀郡眞野村の中村與氏の次男として生れた。幼時や、少年時代が如何であつたか、自分はよくは知らないが、いろいろな事にまめ々々しく没頭研究する癖が既に早くから芽生へてゐたと言ふ。生家は、十幾代も前から、村での名望家で、近年までは、年々三百餘俵の年貢米を収め、嚴父は村の村長其他の名譽職にも幾度か舉げられ、交際も廣く、一般の尊敬を受けてゐた。要君は一人の長兄と、二人の令弟と、二人の令妹とを有し、總計六人兄弟の第二子であつた。かのハレイ彗星の現はれた1910年（明治四十三年）の四月に生地眞野村の小學校に入り、大正五年（1916年）の春、同校を卒業して、直ぐ、京都の同志社中學に入つた。中學時代にも特筆すべき事は知られてゐない。只、別稿にある遺稿「寮生活」は、同志社時代の寄宿寮の生活の一斑を偲ばしむるに足る。

要君が何時頃から天文に興味を覺えるやうになつたかは、やはり、明らかでない。只、此の點に關する最初の消息は、大正八年の頃、要君が京都帝國大學北門に近い百萬遍あたりに下宿してゐて、大學天文臺あてに二つ三つ天文上の質疑事項をハガキで聞き合はせに寄越し、其れに對して、百濟理學士其他の人々が返事を出したぐらゐの事が記憶されてゐるに止まる。

大正九年に天文同好會が創立され、まもなく、海老恒治氏等の熱心によつて、同志社の中に支部が設けられたときから、自分は此の支部の例會に度々出席したが、要君は此の同志社支部例會に集まる常連の一人であつた。

要君は大正十年の春に同志社中學を卒業した。それから、「高等學校の入學試験を受けるのです」と言つて居たが、實は餘り天文學にみが入り過ぎて他の學科などを勉強する氣にならなかつたらしいことが、誰の目にも見えた。入學試験には不合格となつた。しかし、同君は其れを殆んど何とも思つてゐなかつた。それから、まもなく、愈々本格的に天文家の生活に入る覺悟をき

め、熱心な希望によつて、京都帝國大學の天文臺へ、志願助手として入ることが許された。そして、短かい袴をはきながら、晝となく夜となく、天體の觀測と、圖書の閱讀とに精進することとなつた。

大學の職員になつた最初は、口径5センチ級の小さい望遠鏡を使つて、變光星の觀測をやつたり、或は流星を觀測したりする以外には、只、何となく、手當り次第に書物や新着雜誌を讀んだり、かのハイデ製の10センチ赤道儀で、普通の常識的に有名な天界の珍景を楽しんでゐたやうである。

其の頃の要君は、いはば今日の中學生にもよくある程度の「星のファン」であつて、至極ノンキに、世の中の氣苦勞が無いだけに、甚だ愉快げに、満足げに、其の日々々々を暮してゐたが、「果して此の男が、將來何になるのやら」全く豫想するほどの何ものも認め得ない様子に見えてゐた。只、しかし、其の當時から、一つ特筆されるべきことは、要君の眼の視力が非常に鋭いといふことであつて、（多少、色盲の傾向があることも、當時既に知られてゐたが、）「プレヤデスの中に、星が十二三見えます」などと言ひ出し、吾々を驚かせたこともある。

中村要君が學術上の最初の業績を挙げたのは、かの1921年六月下旬に於けるキンネケ彗星関連の流星群の觀測であつた。此の流星群は、1916年の時、外國で可なり著しいものが見えた歴史があるので、1921年にも何等かのものが見えるだらうと一般に待望せられてゐた。要君は六月二十五日から自分と共に近畿の各地を旅しながら、首尾よく此の流星を發見し、八月初めの頃までも見事に追跡したのであつた。此の流星は多く微光であつたため、學界に多少の批評を生んだこともあつたけれど、要君の觀測は其の後毎年行はれて、最近1930年にまでも及び、殊に1927年に同彗星が再歸した節などは、米國やロシヤ方面の觀測者たちも此の種の流星を認めたので、益々要君の觀測結果を價值付けることとなつた。

微光流星については、尚ほ此のキンネケ彗星關係のもののほかに、1928年六月上旬の、スケレルブ彗星に連關するものや、1930年五月末のシヴスマン・ワハマン彗星關係のものなども、要君は常に熟練と熱心によつて奇効を收め、世界の同勞者たちを驚かせてゐるばかりでなく、國內に於ける若干の微

光流星観測者を指導督勵した功績は、永く記憶さるべきものである。

諒訪の三澤氏と比べて、（果して何れが早かつたか明らかに知り難いが）、中村要君は1920年頃から小形の望遠鏡で太陽黒点を連日観測したものである。或る場合には、例の鋭い肉眼で、主な黒点だけの記録をとつたこともあつた。此の種の観測は、三澤氏のやうに永く繼續して行はなかつたけれど、観測の方法や態度や、其の時々の成績など、非常に優れたものであつて、之れが又、其の後、同君の太陽観測上の貴重な指導的経験となつたのである。

要君は、大學に來て、ハイデの赤道儀やブラシャの反射鏡を使用するやうになつてから、月や、木星や、火星など、遊星表面の觀察を始めた。之れは我が國の天文學界に於いて、全くの最初であり、又、今に至るまでも殆んど獨特の研究方面であつて、それだけ苦心も拂はれたわけであるが、實にスバラシイ成績を挙げたものである。月や木星は、しかし、観測上の経験を獲たといふ程度に、要君自身は止まつてゐたらしいが、火星面の觀察は、1922年の頃から、W.H.ピケリング教授の主宰する「火星觀察者聯盟」に加入して、大に活躍し、ほど二年おきに火星が接近する毎に、必ず何等かの貴重な貢獻を聯盟のために齎した。聯盟の機關誌である Popular Astronomy を讀んで見ると、歐米の人々に伍して、「火星報告」の連載されてゐる中に、要君の名と其のスケッチとが夥しく見付けられる。要君が亡くなつた今日、思ふに、こうした美しい火星面スケッチが日本人の手で又世界に發表せられるのは、果して何時であらうか！？ 感慨に堪えない。

尤も、要君は遊星面観測については、早い頃から可なり良い友人を有つてゐた。其れは即ち神戸のアマチュア天文家 R.スコフィールド氏で、中口径の反射鏡を使用しつゝ、火星や木星の表面を興味深く觀察する人であつた。同氏も可なりの技倆を有つてゐて、殆んど要君と同じ程度の腕前を振つたことも一再ではない。要君とス氏とは、同じ興味で互ひに勵まし合ひつゝ、一時は兄弟のやうに親しく交はり、共に其の成績を以つて、ピケリング教授を喜ばしたが、何としても、ス氏はアマチュアの身分として、平生多忙な俗事に日を送る人であるため、観測は時々中止され、結局、氣の向く時にのみ行はれるのであつたが、要君の方は、とにかく専門的に全時間を天體觀察に費し得

る立場にあつたので、準備や基礎研究もよく行き届き、従つて、眞に權威ある観測者としての成績を挙げ得た。年月の進むと共に、要君の火星面研究は全く深い自信の上に築き上げられるものとなり、最後の日の遺書の中にも、顧みて火星の事を書き記したほどである。只、誠に残念な事は、來1933年の春に接近して來る火星を、要君は觀察することを、かねてから熱烈に希望しつゝあつたに拘らず、其れを遂げなかつた事である。若し此の1933年度の火星觀察さへ行はれれば、1920年、1922年、1924年、1926年、1928年、1931年、及び1933年の、前後七期を通じて、火星面のあらゆるシーズンの模様の観測が完成し、成就する筈であつたのであつて、要君自身も、最後の日の、最もいたましい心残りは此の事であつただらうと思はれるし、又、吾々としても、是非此の火星観測を一應完成させたかつたと、残念に思ふ次第である。

中村要君の残した業績の一部に、變光星の観測や発見がある。之れはよほど以前から着手したものであつて、比較的に小形の望遠鏡でも成し得る仕事であるし、又、他の仕事の合ひ間々々々にも簡単に出来るたちのものであるから、思ふに、最近までのものを合算すると、結局、幾千とか、或は幾萬とかいふ夥しい観測結果を残してゐるのではないかと想像される。尤も其のうち幾バセントは既にハーブード天文臺ブレテン等を通じて發表されてゐるが、しかし、尙ほ大部分は未發表である。今後、吾等の手で此等を出來るだけ精細に整理し、適當な形式を以つて、學界に送りたいと思ふ。新しい變光星の発見も幾つかはある筈であるが、精しくは今直ぐにわかりかねる。

要君がスコフィールド氏と交際することによつて新しい興味をそゝられたと思はれることの一つは、太陽のプロミネンスを眼視的に観測することであつた。ス氏は1922年の頃、既に此の種の希望を持ち、自分の所へも種々器械の構造等につき問ひ合はせに來られたことがあつたので、自然、要君にも同じ様な相談があつたことと思はれる。之れが1925年頃には具體化して、ス氏は暫く其の観測結果を天文同好會に報告され、ブレテンを賑はした。要君も亦此のプロミネンス観測を是非やつて見たいと常々言つてゐたけれど、當時までは京都に適當な分光器が無くて、仕方が無い次第であつた。ところが、1926年の頃に、自分は英國のアダム・ヒルガト會社に交渉して、プロミネンス

観測用のスペクトロスコープを、公用と私用と、都合二臺買ひ入れたので、要君も大變に喜び、早速之れを望遠鏡に取り付けて、観測を連続に行ひ、尚ほ此の種のスペクトロスコープを使用するのに最も適當な望遠鏡の種別や構造等も、要君は特別に研究した。スマトラの日食にも要君は此のスペクトロスコープを持つて行く事を忘れず、あちらで、やはり、太陽をながめて、愈々日食の其の日など、食の起らない以前から、プロミネンスの形について、豫備的な知識を有つてゐたほど、行き届いたものであつた。

彗星の観測は、自分等も以前から特別な關心を有つてゐたものであり、要君が大學へ來られる前から、故佐々木哲夫君が1919d彗星を發見するやら、百濟理學士が1920 ab 彗星を發見されるやらで、わが京都帝大天文臺は彗星の出現と結ぶ縁故は可なり深かつた。従つて、中村要君としても、やはり、彗星には特殊な興味を有ち、都合の好い彗星が現はれれば、必ずそれを觀望乃至觀測することにしてゐた。彗星の日々の經緯度を測定し始めたのは、花山天文臺が出來てからであるが、其の以前から、彗星の光度や、形狀、望遠鏡による觀測能率等は、年々の實地的な經驗をよほど積んでゐた。之れは、花山へ移つてからの研究の進行上に非常に役に立つた次第であつた。

1922年十一月、要君は小犬星座のあたりで、待望されてゐるペライン彗星を搜索中、ほゞ豫定の所に其れらしい星像を認め、尚ほ其れが豫想の如く運動することさへ認めたらしいので、早速之れは新城主任教授から東京天文臺へ知らされ、東京からは又、世界の天文電報中央局であるユクル天文臺へ知らされたものだから、此の發見報は比較的早く全世界に廣まつた。自分は當時米國ヤーキース天文臺に居て、此の電報を見、大に喜んだものである。そして、ヤーキース天文臺で自分が使用してゐたブルース望遠鏡を以つて、連夜、此の中村彗星の搜索のための寫眞撮影を行つた。ところが、甚だ残念にも、彗星は寫眞板上に現れず、又、他の天文臺でも此の彗星の正體を認め得ず、結局、學界に多少の失望を與へた結果に終つた。要君が此の年十一月三十日から十二月二日まで、三夜連續觀測した「彗星」は、光度が十三等級であつて、此の點から言つても、銳眼の同君以外には殆んど見えない程度であつたと共に、各地の天文臺で強力な望遠鏡寫眞にも認められなかつたものだから

ら、一時、いろいろの説が行はれ、^レ他にも例がある通り、何かの都合で、急に光輝が衰へたのだらう^トと言ふのがあり、或は又、^レ始めから一種の錯覺でなかつたのか？^トとさへ言ふ人もあつた。しかし、結局、之れ以上に積極的な材料は獲られなかつた。

要君が発見した彗星の今一つは、1930年の十一月中旬にg彗星といふのを口径11センチのカメラで撮影したことであつた。此の星は其の後、約2週間のうちの十枚ばかりの寫眞に微光の影像を現はし、其の位置の測定値から軌道要素の算出にまで進む順序を取つた。1922年の事もあるので、こんどは自分達もよほど大事をとり、軌道の形がほど知れてから、其の要素や推算位置等を含んだ発見電報を、十一月二十日頃、コペンハーゲン中央局へ送つた。之れが、後から思へば、少々念が入り過ぎてゐて、又、好機を逸したことになるつた。何となれば、此の発見電報を諸外國の天文臺が受取つた頃には、彗星の光りが既に微弱となつて了つたのか、とにかく又、誰もほかに之れを觀測し得なかつた。そこで、要君は再び非常な責任を感じ、ウンと精力を注いで、徹底的に此の問題を研究する段取りを決め、彗星像の現はれてゐる寫眞原板の測定を幾度もやり直し、又、其れから、軌道計算の原理や方法其のものを研究しつゝ、幾度も計算を繰り返し、遂に前後約九ヶ月を費して、1931年八月に、研究全部をきれいにまとめて、花山ブレテン第211號に發表した。之れにより、學界の謎も一先づ解決し、今1932年度の英國ロイヤル天文學會月報には、クロムメルン氏が此の中村彗星1930gを正式に原簿へ登録したと發表した。永く要君の精力を傾倒せしめた難物ではあつたが、此の彗星の研究によつて、要君は圖らずも、彗星の寫眞像に關し、又、軌道計算學に關し、深い研究上の經驗を獲得したのであつて、彗星そのものを獲た以外に、副産物も可なり多かつたわけである。

こうした難物の一つ二つを外にして、要君が觀測した彗星は夥しいものである。觀測は始め寫眞術の應用として行はれたが、1930年の末からは、クク赤道儀による測微尺觀測を遂行し、時間と努力との點に於いて、甚だ能率を擧げた。

赤道儀の測微尺による天體觀測も、わが日本の天文界に於いては餘り例の

無い方面である。測微尺は京都にも東京にも可なり早く備へてゐるけれど、殆んど此の種の観測は、誰も未だ手をつけないものであつた。此の方面にも要君は敢然としてスタートを切つたのであつて、之れがためには、既に幾年も前から、器械の構造や、測定の理論や、計算の方法等につき、深い準備研究を積んでゐた。

中村要君が自分あての遺書中にも記してゐる天文業績の一に、小遊星の観測や発見のことがある。要君が小形カメラにより小遊星の寫眞撮影をやり出したのは、遅くとも1928年の頃、即ち、花山が未だ出来上らない前からであるが、花山に諸器械が移つてからは、一層此の方面に奮勵した。其の大體は、花山のブレテンを見て貰へば一目瞭然である。殊に1930年八月、口径11センチの三重玉レンズが出来てからは、ブレテンの殆んど毎號に、中村君の署名ある小遊星観測報告が載ることゝなつた。此等の報告は、多く、花山ブレテンに發表されると同時に、ドイツ國ベルリンの天文計算局に送られ、同局出版のブレテンにも載つて、其の紙面を賑はし、我が日本よりの誰一人として活躍した。此の小遊星寫眞撮影観測中、要君は前後九回にわたり新天體を発見した。之れは同君が勤勉の當然の結果であつて、甚だ慶賀の至りである。

順番	番號	假名	發見年月日	備考
1	—	Kyo 1	1928年 8月27日	1928 QM
2	—	Kwasan 1	1930年 9月19日	1930 SR [Comas Sola, 9月 30日]
3	—	Kwasan 2	〃 9月18日	1930 SB
4	—	Kwasan 3	〃 9月19日	1930 SS
5	—	Kwasan 4	〃 8月17日	193 OQS
6	(245)	Kwasan 5	1931年 6月 8日	— (245) Vera
7	—	Kwasan 6	〃 6月 8日	1932 AA [Max Wolf, 1月 1日]
8	(1214)	Kwasan 7	1932年 1月 6日	1932 DB [Schwassmann, 2月 28日]
9	—	Kwasan 8	〃 3月 2日	

上表の小遊星は皆寫眞によつて中村要君が発見した新天體である。しかし、其のうちの若干のものは、(他にもよくこうした例がある通り)、後になつて、軌道計算の結果、既知の天體であつたことが知れたり、又、僅かに數日の差で歐米の観測者に発見の先鞭をつけられたりしたものもあるのであるが、そ

れでも尙残りの或る天體は、結局、中村君だけが唯一眞實の発見者であつたことが立證されて、確定的な番號も與へられ、命名權も與へられる日が來ることゝ豫想される。

1930年末から1931年初めへかけて、世界人一般の注意を惹いた小遊星エロスは、やはり、中村要君が熱心に觀測した一人である。早くも1930年の十月に同君はエロスの寫眞像を認め、其の後、光輝變動や、星像の特異性にも注意を怠らず、遂に1931年一月中旬に至つて、エロスの形狀が恒星狀でなくて、むしろ連星狀であることを發見し、同年二月にはエロスの自轉する事實までも確認した功績は、流石、銳眼を武器として多年戦ひ抜いた技術の賜であると感じさせられる次第であるが、しかし、要君として見れば、此等の成績は寧ろ副産物であつて、始めからエロスのために計劃してゐたプログラムは、全世界の多くの赤道儀觀測者に伍して、太陽視差の研究資料を獲るため、此の星の精密位置を測微尺によつて測る大事業であつた。此の結果は、まだ未整理のまゝであるが、近いうちに之れは、整理されて、發表される筈である。

1929年五月9日の皆既日蝕觀測のため、自分等と共に、京都帝國大學天文部からの派遣隊の中に加はつて、はるばるスマトラ島まで出かけたことは、中村要君の短かい一生涯を通じて、可なり特筆すべき事件であつたことは言ふまでも無い。此のスマトラ遠征は、實質に於いて、要君と自分とが計劃の全部を行つたものであつて、殊に同君は觀測用諸器械の製作や設計から、往復の大貨物の荷ごしらへは言ふに及ばず、觀測のプログラムまでも、立ち入つて働き盡し、又、觀測の結果に於いても、最も優秀な成績を舉げた偉勳者であつた。若し、同君が居なかつたならば、大小二臺のコロナグラフに使用されたレンズ等は言ふに及ばず、寫眞乾板の撰擇等に於いても非常な不便を経験しなければならなかつたことと思はれる。實に、遠征の始めから終りまで、重要な人物の一人であつた。

前後十數年間の天文生活中に、中村要君は實に多方面の經驗をしたものであるが、寫眞に關する一切の技術も、亦、其のうちの重要な一つであつた。

レンズの知識は言ふに及ばず、諸種の乾板について、又、其れ等の暗室内に於ける處理について、年と共に其の技能を磨き上げ、最近年は、眞に立人ら

しい寫眞エキスパートとして、實に何所に押し出しても恥かしくない腕と自信を持つてゐた。前記した諸方面の天體觀測——例へば、月や、彗星や、小遊星や、日食等、そのほか、星霧や、諸種の星野寫眞など、——皆此等が優れた成績を獲たのは、同君の寫眞的技術が優れてゐたことに歸するのである。

最後に、中村要君の遺した最大効績は、何と言つても、かの誇らしい光學品の製作と、其れに關連する諸器械の設計や研究であつた。ほんとうに、生れつきの天文家らしくスクスクと延びて來た要君は、技術者として、やはり、何のどよみや、無理も無く、全く自然に成長して來た人であつた。同君は中學の最上級の時、既に「一時望遠鏡」といふものを自作して、何等かの實用にも供し、其れを無心にエンジョイしつゝ、友人にも薦めてゐた。大學に入つてからは、オトエⅠ製の5センチ・ファインダー、ハイデ製の10センチ赤道儀、プラシヤ製の25センチ反射鏡、ザトリウス製の18センチ赤道儀などといふ順に、大學所有の大小望遠鏡を殆んど悉くマスターすることに専心し、遂にはカルプⅠ作の32センチや、同33センチの反射鏡や、同じ46センチの望遠鏡、更に又、クク製の30センチ大赤道儀に至るまで、あらゆる天文器械に一通りの——否、一通り以上の深い研究と経験を積んだのであつて、此等の豊富な知識と興味が、1925年頃から、一轉して、光學品の自作へと向つて發展したのは、誠に自然な開展であつたと言ふべきである。1925年の何月何日頃であつたか、はげしい勞働の兵役生活から大學へ歸つて來て未だ幾程もないと思つてゐた頃の或る日、自分は、要君から、

『先生、反射鏡を一つ磨き上げました。見て下さい！』

と言はれ、驚異と喜悅とにみちて、汚い工作場の一隅へ案内されたことを今も尙ほ覚えてゐる。それからは全くのトントン拍子に、作られる鏡面の數も増し、試験や整形の技術も、目に見えて進んだ。そして、1928年頃からは、手磨きでなしに、簡単な自作器械で、器械的に鏡面を研磨することにもなり、仕事の進みは一層速やかつた。又、1929年から、對物レンズの設計や製作にも成功し、それも、間もなく、改發氏のための15センチ玉や、自用のための11センチ三重玉の如く、優れたものが、「何時の間にか出來上る」といふ程、易々として生産された。最近には、改發氏のために口径13センチの寫眞玉を

磨き終り、大きい責任を果たしたと、喜んでゐる有様を見たのが本年の初夏の頃であつたが、一方に於いて、天文臺用のため、口径22センチといふ大形の寫眞玉を作るべく、既に1930年末頃から、苦心設計してゐる様子が伺はれた。但し、此の22センチ玉は、最近、病勢の募るのを見て、一時中止するの止むなきに至つたが、とにかく、一體に著しい技術の進展には、誰も驚かされた。要君が死した今、其の机上に残された光學品研磨 Note 約十冊は、前後七八年に渡る此等の作業と其の成績に關する一切の覚え書として置かれてある。之れを見ると、同君が自作の光學品は、

バラボラ鏡が	總計	300面、
平面鏡	〃	10面、
對物レンズ	〃	40組、

であつて、いかにも多量であることに驚かされる。

こうした光學品の製作ばかりでなく、要君は、數年にわたつて、大小種々の望遠鏡を設計した。始めは普通の經緯式反射鏡から、漸次特種な極軸望遠鏡や、彗星搜索機や、寫眞専用の赤道儀にまで及び、大きさも、口径25センチ反射鏡や、15センチの眼視望遠鏡に至るまでに進んだ。こんなわけで、自分などは、人々に『もはや、わが日本にも中口径の望遠鏡は立派に出来るやうになつた』と話し得るに至つたのである。

中村要君が天文界に入つてから前後十幾年、上に記したやうな多方面の研究や觀測に、百バセント充實した學究生活をやつて、しかも其の成績に於いては、普通の人の、二人前や三人前の仕事をした有様であつた。と同時に、同君の仕事の中には、日本の天文學界に於いて全くの新分野であるものが少くないことは驚嘆すべきである。例へば、火星面の觀察や、天體寫眞術の研究や、天文望遠鏡の構造に關する種々な研究など、尙それに、微光流星と呼ばれる新種の天體の認識など、皆、同君の貢獻は大なるものである。それから、分野は必ずしも新分野でなくても、同君の勤勉によつて、量的に大量收獲を得たのは、例へば、變光星や、小遊星や、普通の流星など、此等は何れも今までに發表されたものは少なく、未整理未發表の部分が非常に澤山残されて、今、花山天文臺にある。前にも記した通り、之れは今後一兩年のう

ちにでも、是非整理したいと思ふ。此の整理が完成して發表されれば、同君の學的聲價は、今までに數倍するものとなることであろう。

中村要君は、腕の人であると同時に、（知る人は、よくよく知つてゐるやうに、）熱の人であり、又、徳の人であつた。誰でも、三十歳に滿たない此の一青年學徒に、會つて、親しみと、なつかしみを永く有たない人はなかつたであろう。體軀は堂々として、[「]すもう取りのやうに[」]巨大でありながら、心は誠にやさしく、デリケートな感情の持ち主であつた。此等の[「]人間としての中村君[」]については、本誌別頁にある多くの友人たちの寄稿文によつて充分に窺はれると思ふ。

友として、自分は永く交つた。そして今は、もはや、肉親にも等しい近しさを感じてゐた。只、しかし、要君は、どうした運命の惡戯か、世にも珍らしい家庭上の悩みを負ひ、それを、自分には言ふまでもなく、他の如何なる人にも絶対に言はないで、どこまでも悩み續けたのであつた。自分も、かねてからそれと察してゐたので、成るべくは、其の悩みを共に負擔する覺悟で、話の糸口を求めたこともあつたが、堅く決心したらしい同君は、最後の日まで悩みを秘して、其のまゝ永久の旅に立つて了つた。

要君の死因は、いろいろな立場の人々から、いろいろに考へられるだけで、果して、神經衰弱か、眼の廢疾か、家庭の悩みか、自己の行きづまりか、其の他尙ほ我等の思ひ及ばない種々のものがあつたのかも知れない。自分には、既に本年七月の頃から、要君の身邊には或る重大な事件が起ることが豫感されたのであつた。九月24日の午後、自分は長野縣の出張先きで、君の急死を報する二通の電報を京都から受けたのであつたが、其れを見て直ちに思つたことは『いよいよ、やつたか?!』といふことであつた。決して單なる驚きではなかつた。

要君に最後の決心をさせた直接原因は、九月18日、君の實の祖母が死去されたことであつたと思はれる。長野縣から急ぎ歸洛した自分の宅へ、次のやうな一枚のハガキが來てゐた。之れは、君から自分に送られた最後の便りである。日附は24日であるが、實は少しく以前に遡るのではあるまいか? 可なりの落ち付きある文ではある。

拜啓

小生祖母十八日夜半近く死去致し、小生療養上甚だ災されました。大學の方でおかまひ下さらぬ様、御願申します。

7. 9. 24. (スタンプの日付)

眞野 中 村 要

山 本 一 清 様

中村要君が、いよいよの時の迫る九月24日の早曉を知りつゝ、自分へあてゝ書いたと思はれる遺書の一部は下の如くである。

山本一清先生

小生が長い間自分で不眠症で今に直る位に思つて御知らせせず数箇月も経て自分の始末のつかぬ様にしてから申上げたことが全く失禮でしたし間違つて居ります。自分では兄の死後餘りに大きな負擔を與へられ敢然と戦つてきましたが遂に自らの體を害し自分では急に直らない病氣の爲めに凡ゆる方面、勿論直るまで待つても良い様なものの其れは自分の事情として全く許されない事なのです。詳しい事情は申しても私事でありますから止めておきたいと思ひます。小生は外觀上餘り變らないので簡単な症状のやうに考へておいでだつたかも知れませんが左様ではなかつたのです。小生が今回の方法をとる以外自分の立場が無い様に思はれます。氣の小さい事は確かですが仕様がななのです。餘りに貧弱な〇〇です。

全く長い間御導き下さいました事を厚く々々謝します。小生の研究室の物品は何んか研究のために公開し、反射鏡其他の製作品は研究に御使用下さい。(中略)

自分のやつた仕事では、光學方面のものが最も大きいでせう。これは四五冊のノートに鏡の事が記してあります。O.G. も其の一つです。全く大きい仕事ですが、全く仕事をマスターしてから體の點に失敗に終わりました。次の天文の仕事で小遊星の方です。マスも一つです。(下略)

書きたい事はいくらでもあるが、いろいろと、過去の事を思ひめぐらすと、自分は、胸がせまつて、筆が殆んど進まない。若くして學に志ざし、奮勵力行して十年ならざるうちに既に學界の頂點にまで近づいた彼れ、いよいよ之れから生涯の最も花々しい時代を迎えて、如何ほどの成果を挙げ、世界文化の進展のため如何に大きい貢獻をするであろうかと、知る者皆が期待してゐた彼れ！此の俊才の花々しい生活の半面に、實に稀代の惡運命が待ちかまへて、强健と見えた彼れの心身も、遂には之れに堪えざらしめ、無慘にも倒れめた事を思ふと、悲哀を通り超えて、吾々の心は寧ろ憤激の情に燃ゆるを覺える。(1932, 11, 1)